

## 8 総合討議

山崎信二 討議に先立ち、最初に、191 頁以下に掲載されている瓦について補足説明をいたします。というのは、これらの拓本や実測図は、すべて日本人の研究者が作成したものであるため、中国の研究者の文章と図面とが十分噛み合っていない、あるいは十分表現されていない部分があります。つまり、日本の研究者が観察した結果が、文章の中にまったく表現されていないこともあるわけです。ですから、まずそれを補うために、中国で作成した瓦の図面について、これから説明したいと思えます。

ただ、私も1年目の大同（平城）とか鄴城の瓦は見えておりませんし、2年目の南京、揚州の瓦は見ましたけれども、3年目は洛陽の瓦だけで、西安等の瓦は見えておりません。したがって、全体とすれば、調査したうちの6割程度しか、私も実物を見ていないのですが、見ていないものについては、おのおのの研究者が写真とか実測図、調書をとっておりますので、それをもとに説明したいと思えます。

なお、「石田メモによれば…」という表現が出てきますが、これは、写真などから判断して、「石田メモが正しいと私は思う」という意味で使っております。ですから、決して批判的に言っているわけではなく、基本的にそう認めてよいということです。時間の関係でちょっと早口になりますが、全体の流れだけ理解していただければと思います。

それから、今回は、文字瓦・ヘラ書き瓦・刻印瓦については触れないということをあらかじめお断りしておきます。

まず、北魏の大同（平城）の瓦です。203 頁をご覧ください。5世紀の瓦ですね。1番は、上下とも指の圧痕が見られます。指紋が明瞭に残っています。凹面はタテミガキです。2番は爪形のような圧痕があり、凹面はタテミガキです。3番は、端面下端の断面形態から見て、指で捻っているのではなく、工具の押圧によるものです。凹面はタテミガキです。204 頁をご覧ください。1・2番瓦は下端に爪形のような圧痕があります。3番は獣面文の軒丸瓦です。205 頁の1番は、林メモによると、瓦当面はたんに爪形を施すだけで、それ以外に特別なことはしていないと書いています。

3番は、林メモでは、まず広端面に1条の沈線を施し、次に端面下端を押圧する。そのため、押圧によって盛り上がった粘土が何かで押しつぶされて、半円形になったとしています。4・5番はヘラ書きの文字が平瓦凸面にあります。206 頁をご覧ください。2番は六弁の蓮華文軒丸瓦で、中房蓮子は1+5です。外区外縁に珠文ふうのものがああります。3番は出土地が「方山」とのみあります。ミガキ・ナデをおこなっていますが、粘土紐と杵板痕が観察できます。朱岩石さんの論文では、24 頁の上段の1番に写真が載っているものがそうです。207 頁のものは出土地が不明なので、省略します。

次は、北魏洛陽城の瓦であります。222 頁をご覧ください。1番の獣面文の軒丸瓦の瓦当裏面には、キザミが見えます。3番は平瓦端面中央にヘラで沈線を入れて、下端を指で押して、最後に瓦当全体にヨコナデをおこなっています。223 頁を

ご覧ください。2番の丸瓦には凹面に粘土紐の痕跡があり、布目は玉縁部凹面にまで続いています。224頁の丸瓦も同様です。225頁は軒丸瓦・軒平瓦であります。1・3・4番の軒丸瓦は、瓦当裏面にキザミを入れています。5番の軒平瓦の作り方は、次のようになります。第1段階は、中央部を切り込んで二重弧を作り出します。第2段階は、上の段の中央を工具で爪形に突き、さらに下の段の中央を工具で爪形に突きます。第3段階は、上の段の下側を工具で擬波状にします。また、下の段を工具で擬波状にします。第4段階は、瓦当面にミガキを入れて仕上げます。これも、朱さんの論文の25頁中段に写真があります。次に226頁です。平瓦部凹面のみミガキがかかり、瓦当面にはミガキがありません。227頁の1番では中央部に切り込み、ちょっと見にくいですが、切り込みがあります。それから、指による押し付け。これは指紋が残っています。そして3番は、瓦当部を磨いて波状文のはみ出し部分の切り取りをおこないます。

次に、鄴城の瓦であります。238頁をご覧ください。1番は波状文の平瓦で、凹面の波状文寄りに格子状の当て具痕があります。凸面に平行叩き痕が見えます。2・3番については、調書および実測図がありません。5番の瓦当裏面には、丸瓦部端面のキザミの転写が見えます。朱さんの論文の26頁上段3に瓦当裏面の写真が載ります。6・7番は瓦当裏面にキザミがあります。9番は、丸瓦部端面と瓦当裏面の両方にキザミがあるようです。239頁をご覧ください。1番は、丸瓦部先端に施したキザミの転写が見えます。格子状の凸線となっています。これは、朱さんの論文の26頁上段の2に写真があります。4番は、平瓦部凹面に布目を完全に残しています。粘土紐と桯板の痕跡

が見えます。瓦当は、工具によるキザミで施文しています。朱さんの論文の25頁の下段の右に写真があります。5番の波状文は、指による押圧で作られています。朱さんの論文の25頁中段の4に写真があります。240頁をご覧ください。5番には丸瓦部先端のキザミの転写があります。6番は、瓦当裏面のキザミと丸瓦部先端のキザミの両方の転写があります。241頁では、1～4・6・8番に瓦当裏面のキザミがあります。5番には、丸瓦部端面のキザミの転写があります。9・10番は、指による押圧で波状文を作っています。242頁は、1～5番に瓦当裏面のキザミがあります。4・5番に丸瓦部端面のキザミの転写があります。

次が、南京の瓦です。これは、大きく頁が戻りまして、賀雲朝先生の論文です。56頁で瓦当の文様の弁中央に稜線があるものは、1・5・7番。それ以外の2～4・6・8番は、弁中央に稜線はありません。57頁では、1番にも玉縁部凹面に布目はありません。2番は粘土板の合わせ目があります。3番の平瓦には、凹面に桯板痕と糸切り痕が残ります。58頁では、1番の外区に范型による波状文が残されています。瓦当裏面、丸瓦接合部に指押さえの痕があります。指押さえの痕というのは、丸瓦接合時にその部分を指で押し付けているものです。58頁の1番の瓦当裏面には、同心円状のナデがあります。2～5番は弁中央に稜線があるものです。59頁では1～4番に弁中央の稜線があります。それらの瓦当裏面は、周縁に沿ってナデが非常に強く残されています。一方、5・6番は弁中央の稜線がなくなり、瓦当裏面には渦巻き状の回転ナデが残っています。また、60頁では、1・2番は弁中央に稜線がなく、瓦当裏面に渦巻き状の回転ナデが残っています。次に、61頁では、5番の平瓦は桯板痕と綴じ紐痕があつて、糸切り

痕は見えません。はっきりとはわかりませんが、粘土紐ではないかと思えます。6番は弁中央に稜線があります。玉縁部凹面はヨコナデで、布目はありません。62頁では、3番は弁中央に稜線があります。4番は弁中央に稜線があって、瓦当下半には周縁に沿うナデがあります。63頁は、1～4番とも弁中央に稜線があり、1・3番は瓦当裏面を見ますと、丸瓦部先端にも瓦当裏面にも、接合のためのキザミは見られません。

まとめとしては、南京大学所蔵例では、弁中央に稜線をもつ軒丸瓦が圧倒的に多いということ。また、軒丸瓦では瓦当裏面にキザミ、または丸瓦部先端にキザミをもつものは1例もないということです。それから、瓦当の外区に珠文をもつ軒丸瓦では、瓦当裏面が渦巻き状の回転ナデとなっています。

次に、揚州の瓦に移ります。揚州では、古いグループの軒丸瓦と新しいグループの軒丸瓦で、特徴がはっきり二つに分かれます。

260頁の1番、262頁の1～5番、263頁の1～3・5番、264頁の1・2番というのは、古いグループの軒丸瓦です。この古いグループの軒丸瓦の特徴は、筥の文様がシャープなことでありまして、私は木製の筥型を用いていると考えます。それから2番目の特徴として、瓦当裏面は渦巻き状の回転ナデとなっています。3番目の特徴として、瓦当裏面の丸瓦接合部に、いずれも指押さえの痕が残っています。4番目の特徴として、瓦当裏面および丸瓦部先端にキザミをまったく施していません。

一方、新しいグループの軒丸瓦は、260頁の2～4番、261頁の1・2番、263頁の4番です。その特徴は、まず見た感じでも筥の文様があまい。それから、先ほど問題になっていましたが、外縁

も広がります。筥の文様があまいというのは、私はおそらく陶製の筥型に変わっていくからだと考えています。また、瓦当面中央が非常に高く盛り上がった断面形となります。ですから、断面を見ていただくと、まったく違うことにお気づきになるとと思います。3番目の特徴は、瓦当裏面にキザミ、すなわちカキヤブリをもつということで、260頁の2・4番にあります。つまり、この段階になって瓦当裏面にキザミをもつようになるわけです。そして、瓦当裏面に指を突っ込むものが、260頁の2・3番、それから、261頁の2番にあります。

つまり、揚州の瓦は、7世紀代には南京、南朝の影響下にあつて、8世紀以降のある時点から、唐および北朝の流れ、つまり中国全土的な流れと言ってもいいと思いますが、その影響下に入る。7世紀以降の揚州の瓦は、そういう状況にあつたようであります。

なお、265頁の丸瓦は、玉縁部凹面に布目がなく、ヨコナデであります。266頁と267頁の平瓦は、凹面の梓板痕が明瞭で、糸切り痕も観察できます。268・269頁については省略します。

丸・平瓦については、基本的に、揚州の研究所で出していただいたものを見ただけです。新しいグループの軒丸瓦にともなう丸・平瓦がどのようなものであるのかということは、実はまだわかりません。

つまり、それ以降の軒丸瓦と丸・平瓦が選別できないので、おそらく出していただけなかったんだと思うんですが、そういう意味で、どのように丸・平瓦が変わったかということは、はっきりしないというのが正確なところだと思います。

次に、唐長安城、西安の瓦であります。284頁の1～4番の軒丸瓦は、瓦当裏面にキザミがあり

ます。285 頁の 2 番の平瓦は、凹面に桢板痕があります。また、四隅に分割突起があります。286 頁の 1 番の軒丸瓦は、石田メモによれば、丸瓦を接合するために瓦当裏面にキザミを入れています。2 番の凹面はヨコ方向のナデ、3 番の凹面はミガキです。287 頁の丸瓦は、凹面に粘土紐接合痕、玉縁部凹面には布目が残ります。288 頁の軒丸瓦では、1～4 番は瓦当裏面にキザミを入れていることが明らかです。1・2 番は丸瓦部先端のキザミが残り、2 番はまず間違いなく丸瓦部先端にもキザミがあります。289 頁では、1 番の軒丸瓦はおそらく陶製の范型だと思いますが、瓦当裏面のキザミと丸瓦部端面のキザミの転写があります。2・3 番の軒平瓦の波状文は指押さえによるもので、平瓦部凹面はヨコ方向のミガキで仕上げられています。290～292 頁は省略します。293 頁の軒丸瓦では、1～3 番は瓦当裏面にキザミがあります。3 番は、丸瓦部先端にもキザミがあるようです。294・295 頁の九成宮の軒平瓦では、平瓦部凸面に縄叩き痕を残すものがあります。296～299 頁は省略します。

最後に、隋唐洛陽城の瓦であります。317 頁の軒丸瓦をご覧ください。丸瓦部先端のキザミは 1・2・6 番にあつて、瓦当裏面のキザミは 2・5・6 番にあります。318 頁の軒丸瓦では、丸瓦部先端のキザミが 1・3 番にあつて、瓦当裏面のキザミが 2・3・5 番にあります。321 頁の 1 番の平瓦部は、凹面の桢板痕の幅が 2.5 cm で、これ以外はつるんとしていて明瞭ではありません。分割突起は四隅に残っています。322 頁の 3 番の軒平瓦は、まず重弧を作り、次に中央を革状のものではさんで上へ押さえる。そして、下端を革状のものでつかんで上方へ押さえています。323 頁の 2 番は軒丸瓦の丸瓦部でありまして、丸瓦部の端

面にキザミを入れています。324 頁の平瓦は、凹面に桢板痕が明瞭に残っています。そして、四隅に分割突起があります。325 頁の軒丸瓦では、瓦当裏面にキザミのあるものは、1～4 番であります。326 頁の軒丸瓦では、2 番に丸瓦部先端に歯車形の切り込みを入れた痕が残ります。3 番には瓦当裏面にキザミがあります。

昨日、私は、中国の北朝・南朝の瓦を区別するとき、平瓦における 5 種の型を識別しなければならないということを申しました。以上の説明をつうじて、私が言いたかったのは、それ以外に、丸瓦接合部のキザミ、とりわけ瓦当裏面のキザミを注意して見る必要があるということです。もちろん、瓦当文様の類似性を考慮することも必要ですが、ということで、私からの図面の補足説明は終わらせていただきます。では、佐川さん、討論のほうをよろしくお願いします。

**司会 (佐川正敏)** 討論の前半の司会をいたします佐川でございます。

**司会 (亀田修一)** 後半は亀田が担当させていただきます。

**司会 (佐川)** 時間が限られておりますので、前半の中国・朝鮮半島の関係という部分につきましては、2 時半ぐらいには終わるということにしたいと思います。

昨日、朱岩石さんから、鄴城を中心とするお話がありました。鄴城は、五胡十六国の段階で三つの国の首都になっているわけですが、そこで、漢城時代、漢城期の百済の風納土城との関連を想起させる樹木文、あるいは、私の文章の中では揺銭樹文という表現を使いましたが、こういった瓦が相互に出て、何らかの関連性を想起させるわけで

あります。まず、このあたりから順々に、中国の南と北のいろいろな差や特色などの問題を絡めて、韓国とも比較しながら進めていく、というかたちをとりたいと思います。

それでは、最初に朱さん、この鄴城の五胡十六国時代の段階の瓦なんですけど、この作り方というのは、基本的にはいわゆる「接合式」、瓦当の裏側に半分に分けた丸瓦を付けるという、そういう作り方であるということによろしいでしょうか。

**朱岩石** そうですね。五胡十六国時代の都でもある鄴城では、いろいろな遺物が出ますが、とくに瓦は相当の出土量がありますが、作り方を確認できる瓦というのはたいへん少ないです。丸瓦との接合方法についても、実例がないわけではありませんが、南北朝時代のものと同じかどうか、はっきり言えません。瓦当と丸瓦の接合技法という点では、やはり後漢時代と近いかもしれないです。よろしいでしょうか。

**司会（佐川）** 今日、午前中、亀田さんから風納土城の瓦についてお話があったわけですが、いま映しているこの瓦の技術的な問題がかなり重要になってくると思います。今のところ、中国の鄴城では、たとえば一本作りだとか、あるいは接合式だとかいうように明確に断定できないんですけども、この点については何かありますでしょうか。

**朱** 丸瓦の部分が残っていませんが、この瓦は、破片から判断して、一本作りだと思います。

**司会（佐川）** 実は、この瓦を観察した際に、私の記憶では、朱さんが遼寧省の朝陽で何か類似した文様の瓦をご覧になったようなことを伺ったのですが、それについて、文様あるいは作り方の点でも、何か特色に関するご記憶がありますでしょうか。

**朱** そうですね。遼寧省の朝陽には、もともと五

胡十六国時代の前燕の都城、龍城という都城がありまして、5年ぐらい前から緊急発掘調査がおこなわれています。瓦は、鄴城のものとはちょっと違うかもしれませんが、韓国から出土した樹木文と似ているかなと思います。また、資料は未発表ですけれども、中国の北方、東北地方、それから朝鮮半島という範囲が、瓦の製造技術という面では関連性があると考えております。

**司会（佐川）** この鄴城よりもさらに北の遼寧省一帯でも、同じような文様をもった瓦の製作技法は、今後、注目していかなければならない部分だと思います。そこで亀田さん、午前中のお話で、風納土城の瓦に製作技法の上での多様性があるということでしたが、そのあたりについて簡単にまとめていただけますか。

**亀田** 今、映っています下の瓦、文化財研究所に置いてあるものですが、これ以外のものは、先ほど図面も出ていましたけれども、瓦当裏面の、ちょっと狭めたぐらいのところ突帯を持ったりすることがあります。そういう点から、基本的に粘土紐を巻き上げて、後で半截するグループだと思います。

それに対して、私の資料でいきますと、143頁図4の3番と5番はよくわからなかったのですが、1・2・4・6番、これらは基本的にちょっと瓦当径が小さく、粘土紐を巻き上げた直径が大体10cmぐらい。実際に出土している丸瓦と直径がほぼ同じになりますので、おそらく組み合うんだろうということがわかりますけれども、その中で基本的に粘土紐を巻き上げているものと、布目を持つものも当然あったわけです。5番の獣面文のものに、先ほどご覧いただいたように、接合式の粘土円筒を押し付けていると思われるものがありますので、少なくとも粘土紐巻き上げのグループの中

に、二つのグループはどうもありそうです。

今のお話から言うと、たとえば2番、○に十の字の入ったものが出土しています。中国にこのグループがありますので、これが中国の北、朝陽等にあるのであれば、北からのルートで入ってきていると。ただ、問題なのは、作り方がどうかということでしょう。もともと百済にこういうものはないわけですから、文様も一緒に入ってくるのか、別にあつたものが入ってくるのか、普通に考えれば、どこからか文様と技術が一緒に入ってくるとみたほうが説明しやすいと思いますけどね。

ただ、それと別に、この瓦ですね、今のところ洛陽とかにあるようなので、そうすると、そのあたりとの絡みというのもまた考えなければなりません。そういう意味では、作り方も含めて、当然ですが、これらの中でもグループが最低二つはあるということなんでしょうか。

**司会（佐川）** どうもありがとうございました。

昨日の山崎さんの報告の中でも、平瓦の作り自体、風納土城には多様性があり、粘土紐模骨桶の粘土紐巻き作りをある程度メインにしつつも多様性がある、そういった指摘がありました。瓦当の成形技法も含めて、多様性の背景ということについては、山崎さん、どのようにお考えになっていますか。

**山崎信二** 背景といますか、そうですね。向井佑介さんが観察したメモによると、4世紀代でも、たとえば大同の瓦の接合状態と鄴城の泥条盤築かというものと、2種類がある。もちろん、4世紀代には何種類もあるのですが、いろいろな接合方法があるわけです。大同というのは雲崗石窟がある場所で、かなり北方地域ですよ。一方、鄴城は洛陽の東側でかなり離れていますけれども、そういう中でいろいろな多様性から考えると、鄴

城がやはり風納土城のメインの技法に近いかなと思います。そして、大同と同じ接合の方法が高句麗の太王陵あたりの瓦と近いかなというのが、接合方法からですが、現時点での私のイメージです。

**司会（佐川）** 昨日からの発表をふまえて、基本的に北朝の成形技法の中では、粘土紐巻き作りが主流であるということ、それに対して、南朝の場合には、おそらく南朝のどこかの段階で、粘土紐巻き作りから模骨をもった桶を使う粘土板巻き作りに代わっていきだろうと。これはまだ見通しといえ見通しなんですけれども、そういうことがかなり明らかになりつつあると思うわけです。

それに対して、瓦当の成形については、とくに北朝以降、非常に単純化するといえますか、接合式がメインになっていくという状況もあわせて確認できます。それについて、先ほどの風納土城をふまえて考えると、これから中国の東北部ですね、今回、瓦の調査では対象とすることができなかったわけですが、この地域の調査を、今後も引き続いて誰かがやらなければならないということだろうと思います。

この五胡十六国時代あるいは風納土城等との関係について、壇上に座っておられる皆さんの中で、コメントや付け加えることはありませんか。

**毛利光俊彦** なければちょっと。

**司会（佐川）** はい、どうぞ。

**毛利光** 毛利光です。中国の鄴城の瓦の作り方について、山崎さんがコメントされた時に、朱さんの論文の29頁の一番下に、瓦の断面が斜めになるものがあります。これは、おそらく一本作りの痕跡ではないかというようなことをおっしゃったのではないかと思うのですが、その点を確認させてください。

**山崎** 見ていないものについていろいろ言うのは

よくないのですが、向井メモには未調整と書いてあるんですね。実測図には割れたように描かれています。おそらく間違いだろうと思います。要するに、毛利光さんたちがそれ以前に秦・漢時代の瓦調査に行かれた後、私も同じような資料を見ましたが、瓦当裏面が未調整という瓦は割に多い。また、瓦当裏面がくぼんでいるものも結構ありますので、未調整というメモから見て、おそらく割れたのではないだろうということです。朱さんの資料の丸瓦の凹面には布目がなく、出土場所は違いますけど、それと結びつけてもいいんじゃないかと思ったわけです。実際にご覧になった方が「これは違う」と明言していただければ、それで結構です。

**司会（佐川）** 私も観察した一人ですけれども、少なくとも私は、そこに一本作りだとか、丸瓦が当たったとかという痕跡を認めておりません。したがって、この三者とも、丸瓦の当たりがないものもありますけれども、基本的には接合式と考えたらよいと思います。しかし、昨日、朱さんから報告がありましたように、南水北調の工事にもなって、北朝のお墓の下から窯が出てきたということですから、今後、そうした資料も充分検討していただいて、結論を出せばよろしいんじゃないかと思います。

**毛利光** しつこいようですが、もう1点。作り方ということで皆さんの説明を聞いておると、韓国に戻りますけど、亀田さんが風納土城の資料について、おそらく瓦当裏面に粘土紐を巻き上げたということで、瓦範を下に置いて瓦当裏面を作る。その上に粘土紐を巻き上げていくという作り方をおっしゃっているわけですね。

山崎さんは中国の瓦の製作技法について、いろいろなパターンがあるとおっしゃいました。それ

によれば、瓦当裏面に直接粘土紐を巻き上げていくものと、それから別途、泥条盤築というか粘土紐を巻き上げて完成した丸瓦を持ってきて、瓦当裏面に接合するものがあり、一見すると非常によく似ていますが、丸瓦の完成をどこでするかという点では、大きな差があるわけです。

私は、風納土城の資料を観察したときに、おそらく瓦当裏面の上に巻き上げたのだらうと考えました。山崎さんが中国で観察されたように、泥条盤築で作った丸瓦を持ってきて接合した可能性があるのかなのか、もしおわかりでしたら、風納土城の資料についてコメントをいただけますか。

**山崎** 秦漢代の軒丸瓦は、基本的には泥条盤築といえますか、筒（模骨）がないものは下から巻き上げる。当たり前のことですが。一方、丸瓦部の凹面に布目があるものは、筒があつて、その筒をどのように抜くかということですが、これについては風納土城にはありません。今は、秦漢代の軒丸瓦の変遷を議論するつもりはございません。

**司会（佐川）** よろしいでしょうか。

**毛利光** はい。

**司会（佐川）** 少し話を先に進めて参りたいと思います。昨日、中国のいろいろな瓦に関して、いわゆる南北差というようなものも明らかになってきたところがあります。北魏の段階で複弁のものもあるわけですが、やはり全体的には、とくに朱さんのフィールドである東魏・北斉の段階というのは、複弁よりも単弁が主流と考えていいようですね。それが、隋・唐の段階になると複弁が主流になってくるということですね。

**朱** そうですね。主流という言い方がいいと思います。鄴南城、おもに東魏・北斉の建物の瓦は、ほとんどが単弁のものです。複弁のものの中にはありますが、鄴城から出土する複弁の瓦当は、い

ちばん後の段階のものと考えています。

ただ今の写真は、鄴北城の銅雀台など三台のあたりから出土したものです。表面もピカピカで、技術レベルが高い複弁のものです。鄴城で黒い色の光沢のあるものは、時代が一番後れると考えています。

**司会（佐川）** 今、矢印を向けています洛陽の永寧寺で出土しましたこの蓮華化生文の軒丸瓦の中には、珠文を周りにめぐらすものがあつたと思うんですけども、やはり鄴北城の場合は、外区内縁に珠文が安定してめぐり出すというのは、やはり東魏・北齊の段階からと見てよいのでしょうか。  
**朱** そうですね。鄴城でも今の段階では、まだはっきりと東魏の瓦と北齊の瓦を分けることが難しいのですが、珠文をもつものは一番後の段階だろうと思います。

**司会（佐川）** これに対して南朝の場合は、賀先生、隋・唐の前半ぐらいの段階まで単弁の伝統がかなり長く残っていくということで、中国の北方とは蓮華文の変化においても違いがあるのでしょうか。

珠文の問題については、おそらく隋・唐の段階で珠文が現れるということ、先ほど山崎さんが説明の中でも触れられましたが、単弁の伝統については、それでよろしいでしょうか。

**賀雲翱** まず、蓮華文の起源についてお答えしたいと思います。蓮華文は、中国で最も古い例が秦代にすでにありますが、その時代の蓮華文というのは、非常に少ないと思います。

一方、今、我々が討論している蓮華文というのは、仏教との関係から出てきたものです。それらの蓮華文で一番古いものがどれぐらいの時代かが問題になりますが、この蓮華文も南京周辺以外でもいくつか出土しております。一つは、東北地方

で比較的早い時期の蓮華文があります。それから、南の広州の方にも、蓮華文の瓦当が、紀元後の、比較的早い時期に出てきます。そして、私が研究している南京周辺にも、そういった蓮華文がある、ということになります。南京のあたりの蓮華文の系統で一番早い例というのは、今のところ、東晋時代ぐらいまで遡るだろうと言われてます。

もう一つ、珠文を配することに関する質問ですが、南朝でも遅い時期、後半ぐらいの時期になりますが、外周に珠文をめぐらす瓦当が出てくると考えています。時代でいうと、梁代にはそうした珠文があつて、その次の陳の時代にもあるということです。これらの珠文を有する蓮華文の瓦当の出現は、おそらく北朝の影響を受けているのだろうと考えています。

**司会（佐川）** さて、我々も賀先生のところで、この南朝の蓮華文の瓦を拝見したのですが、その時は金誠龜先生も亀田さんも一緒にご覧になりました。ただ、私の記憶だと「うわあ、よく似ているなあ」という驚きの声を聞いた記憶はございません。南朝系ということで、もちろん、南朝との接点の中で蓮華文を積極的に採用したというようなことは言えるんでしょうけど。そのあたり、金先生、いかがでしょうか。

**金誠龜** 私も南京の瓦調査に参加させていただいたのですが、韓国の瓦と比較するうえでたいへん勉強になりました。

これまで、新羅の蓮華文の軒丸瓦については、高句麗系とか百濟系を受け継いで、早ければ5世紀後半にはそういう関係が始まったのだろうと言われてきましたが、南京での調査を通じて、6世紀後半から7世紀になっても、そのような関連性があるのではないかと考えるようになりました。

新羅の蓮華文の軒丸瓦の特徴の一つに、弁端が

反転するというものがありますが、そういうものは、百済の熊津期ですとか泗泚期とは少し時期を別にしながらも、それでも連動性をもって展開しているのだらうと思います。その一方で、高句麗系の蓮華文軒丸瓦がありますが、それらについては6世紀の中頃に入ってきて、6世紀後半ぐらいから新羅独自の展開を見せると考えています。6世紀中葉から後半、そして7世紀のそのような軒丸瓦の中には、蓮弁の中央に稜線を入れたり、今日、金有植さんの発表にありましたように、Y字形の装飾を入れたりするものがあります。それらは、やはり高句麗との関係で押さえていくべきだろうと判断しています。

今回、調査に参加させていただいて気づいたことは、蓮弁の中央に稜がつくものが、南朝の瓦に非常に多く見られるという点です。これは、何らかのかたちで新羅の瓦とつながっていくのではないかと考えています。とくに、7世紀中葉以降、後半にかけての新羅の軒丸瓦の文様などを見ますと、蓮弁が狭くなるような感じですとか、文様の面から高句麗系と言われていたものが、高句麗だけではなく、南朝とも文様の変化はある程度連動していく可能性があるのではないかと考えるようになりました。7世紀中葉から後半は、新羅の軒丸瓦が活発に展開していく時期ですけれども、そのことと関係があるかもしれません。

また、南朝というように呼んでいますが、7世紀には隋・唐に代わってしまいますから、そういうものを南朝系の瓦と言っていいのか、それとも隋・唐と言った方がいいのか、雁鴨池などでもそのような特徴をもつ瓦がたくさん出てきておりますので、整理が必要だろうと思っております。

7世紀中葉から後半というのは、新羅が三国を統一して文化を非常に発展させる過程です。瓦以

外でも、外国人の有名な彫刻家などが来たりしていますので、高句麗とか百済との関連性だけではなく、この時期に新羅が瓦製作も含めて発展していく段階に、南朝のそういう技術が直接入ってきているのではないかと考えました。以上です。

**亀田** 新羅などで7世紀代に出てくる瓦には、縁のある稜でボリュームのあるものがあります。高句麗にも見られますが、そういうものは、隋になったら文様が変わってしまうのでしょうか。いかがでしょう。

**賀** 先ほど見せていただいた写真のような瓦が、7世紀後半の新羅で出ているということですが、7世紀後半ですと、もちろん南朝は終わって唐に代わっています。南京や揚州を含めた南の地方の7世紀後半の瓦は、先ほども申し上げましたように、単弁の蓮華文で、周りに珠文がめぐるものになっています。ただ、私個人の考えですが、新羅でそういった南朝の瓦と非常によく似たものが出ているということは、すでに南朝は終わっていますが、新羅が南朝の影響を非常に強く受けたため、中国が唐に代わっても、その影響を受けた瓦をずっと作っていたと考えても不思議ではないと思います。

**司会（佐川）** それでは、南京の方面に足繁く通われ、南朝の瓦を研究されている井内先生、いかがでしょうか。このあたりの問題について何かご見解があればお願いします。

**井内 潔** 突然で何も用意していませんが、南朝の瓦を取り上げる場合、今の段階では常に前もって断りを入れて話をしないといけない。明日になると、たちまち変わってしまう。そんな恐ろしさを、何回か向こうに行くうちに感じております。

今回、賀先生にお話しいただいた健康の都城の中心部では、発掘すれば、何百という瓦当が出て

きていますが、賀先生ご自身が担当された鐘山の祭壇とか寺廟についての資料を私もじっくりと腰を据えて見てはおりません。ただ、基本的に、南朝の瓦は蓮弁が高く、稜あるいは軸線をもっている。それから、鋸歯文をもつものはまありますが、基本的に、外回りの珠文は、南朝の瓦ではめぐらないのではないかと。洛陽などで出ている後漢代の珠文の縁にめぐる線鋸歯文、そういうものの影響で、蓮華文の周りに線鋸歯文がめぐるのは僅かながらありますが、南朝の瓦では、珠文がめぐるのはないのではないかと思います。

それに対して、今、説明されましたけれども、揚州の隋唐の瓦は、珠文をめぐらすことを原則としています。では、そういう蓮華文がいつ頃から南朝にあったのか。現に、賀先生が掘られた鐘山の寺廟遺跡からも出ています。文様だけを取り上げてどうこうと言うのはよろしくないということでしたら、南朝の遺跡から出た蓮華文軒丸瓦の出土状況その他が、『江南文化』とか『文物』『考古』に載ってます。そのあたりが、将来、少し長いスパンで見れば、しだいにはっきりして、それらの時期が遺構のほうでも確認されるのではないかと思います。

**司会（佐川）** ありがとうございます。このあたり、賀先生のお仕事にさらに期待するところ大であります。

ここで一つ、ただ今、井内先生からもご指摘があったように、首都では出ていないけれども、その周辺やどこかでそういうものが出てくる可能性もまだ充分にあるということでもあります。あるいは、この写真の下に載せてありますように、仏像の台座が下敷きになったというような可能性も考えつつ、実は、南京の調査では、誰が見てもこれは瓜二つだなというようなものが、今のところな

いということは、非常に重要な部分であろうと思うわけであります。

また、外縁等の問題については、昨日すでに確認したところです。それから、先ほど山崎さんからも、箆型の違い、つまり木箆か陶箆かという指摘もありましたが、唐の時代のおそらく後半に見られる外縁の幅の広がり、あるいは内区の突出、そういう部分について箆との関係で理解していくという可能性が提示されました。同時に、瓦当裏面にキザミがあるということが北方の特色であり、一方、南朝の場合には、瓦当裏面の丸瓦接合にあたってキザミを施さないということですが、このへんについて朱さん、山崎さんの言われたことについて、何かご意見はありますか。

**朱** そうですね。今、私は鄴城を発掘調査しています。文化層は後漢の後期からずっと北朝まで続きますが、鄴城では、後漢時代以来、一本作りの瓦の出土例はまだありません。漢長安城のほうはかなり多く、やはり前漢と後漢の間、あるいは後漢の前期か中期に、造瓦技術上、大きな変化があったのかもしれませんが。残念ながら、後漢の都、つまり漢魏洛陽城の上層には、三国西晋時代の遺跡や、もちろん北魏の都城も重複しているため、後漢時代の建物や文化層の発掘調査のチャンスがなかなかない、というのが現実です。けれども、やはり造瓦技術の面では、後漢時代がもっと注目されなければならないと思います。

**司会（佐川）** この南朝の、丸瓦接合にあたってキザミをもたないという部分と百済との関連性は、当然、注目されなければならない部分ですが、清水さん、この点についていかがですか。

**清水昭博** 南朝の瓦は、私も直接見た数はそれほどありませんが、瓦当裏面の上端に意外と深く差し込むようなものが多いですね。

丸瓦先端の加工につきましては、観察できる例は少ないのですが、凹面をカットしたものは確認しております。私が、南朝の瓦の一番の特色かなと思っておりますのは、瓦当裏面の回転ナデの痕跡、あるいは丸瓦を接合した痕です。瓦当裏面と丸瓦の端面のところをグッと指で押さえるというものだと思います。そして、そういった技法を百済のほうで求めると、弁端点珠型式、日本で言うと星組のタイプですけれども、その中に確認できるわけです。

弁端点珠の祖型につきましては、熊津時代の大通寺、527年に創建された百済で最初の本格的な寺院ですが、そこで採用されています。この瓦から、南朝と百済との関係が技術的に窺えるのではないかと思います。

また、大通寺についてはいろいろ議論がありますが、「大通」というのは中国の梁代の年号（527～529年）ですので、記録のうえでも百済と梁との深い関係が理解できるのではないかと思います。

**司会（佐川）** これとあわせて考えるべき基本的な問題として、昨日も報告がありましたように、南朝の丸瓦の玉縁の内側に布目がないことから、模骨の形状が北朝と大きく異なっているということがあります。それから、成形・製作の仕方にも大きな差があるということですが、賀先生、南朝のこういった丸瓦の筒の部分に玉縁をのせていくという作り方は、南朝よりさらに遡るのでしょうか。

**賀** 先に筒部を作って、それから玉縁を付けるというやり方は、最も古いところでは東晋時代まで遡ると考えています。東晋の前に三国時代の呉という時代がありますが、この呉と東晋の間で瓦の作り方が大きく変わるということがわかっていますが、丸瓦の作り方でそこに画期があります。

**司会（佐川）** こうした丸瓦の製作技法について

は、南朝の特色であると同時に、当然、百済との関連も考えられるわけです。先ほどより、たとえばキザミとか、玉縁の作り方の部分的な類似性であるとか、そういった点について改めて考える必要があるというご意見が出ています。また、瓦当文様については、直接、瓦からまねたかどうかは断言できないというのが現状ですが、技術的な面から見た部分的な共通性について、金誠龜先生からご意見を承りたいと思います。南朝と熊津期以降の百済の技術的な共通点と申しますか、要するに漢城期からの伝統のほか、南朝との関係で理解される要素について、どのようにお考えでしょうか。

**金誠龜** 少し考えて、後ほどお答えしたいと思います。

**亀田** 先ほど花谷さんからお話があったと思いますが、扶餘の時代（泗泚期）に入って、玉縁の内側に布目のないものから布目をもつものにいつ変わるのかが難しいところです。ただ、亭岩里の窯に布目をもつ瓦があったと思います。この窯の年代に関しては異論もありますが、実際に掘られた金誠龜先生は6世紀の後半代と考えておいでです。そうすると、少なくとも6世紀の後半代には布目ありというものがあろうです。いつそれらが入ってくるのか、ちょっと見えない部分があるんですが。

それから、キザミを持つものに関して、金剛寺の瓦ではわりとキザミを使っているものも多く、少なくとも寺院ごとの差はあるようなんですが、金剛寺に関しては6世紀末ぐらいからかと思いますが。また、軍守里廢寺の瓦の中に、斜めにカットした片柄の部分の瓦当裏面の上部にキザミをつけているものもあり、亭岩里の例と比較しますと6世紀後半に入ります。それから、益山のほうにも

多少ありますので、百済ではやはり6世紀の後半のどこかで出てくる可能性があるのかな、と現時点では考えています。

**司会（佐川）** さて、丸瓦の技法的な問題ということで、大脇先生、お待たせいたしました。実は昨日、大脇先生から中国の王湾、新石器時代の有名な遺跡ですが、ここにこういう資料があるんだということをお示しいただきました。昨日、賀先生が報告の中で、瓦当の外縁の上半がはずれたような例が結構目立つということで、半截した丸瓦をはめ込んでいる可能性があるのではないかとおっしゃったわけですが、大脇先生、このあたりの問題について、少しご見解をお聞かせいただけませんか。

**大脇 潔（浦上泰造）** はい、浦上泰造と申します。今のお話は、花谷さんの資料の128頁の図5、陵山里廃寺の接合技法のC-2に似ていると言いますか、軒丸瓦の上半部分が丸瓦そのものでできているという作り方で、私は勝手に「SR技法」と名づけております。一部の方には賛同して使っていただいておりますけど。

昨日、先生方のお話を伺って、南朝の瓦にもこういうものがあるのかなあとと思います。しかし、図や拓本、写真を見るかぎりでは、ちょっと違うかなという感じもしていました。中国の南朝の瓦が百済へどのようにして入っていったのかについては、確かに丸瓦の玉縁の内面に布目がないとかの共通点がある。また、平瓦の桶の綴じ紐が外に出るタイプと出ないタイプがありますが、南朝には出るタイプがあって、それが百済にもある。そして、日本の新堂廃寺などにも来ている。ですから、南朝のいろいろな技術が、総体としてはありませんが、部分的に百済に入り、日本にも来ていると言えます。

さらに、大通寺などの百済の熊津期の古い軒丸瓦の中には、確実に、このC-2のような断面をもつものがあります。私が「SR技法」と呼んでいるこうした軒丸瓦が南朝にあれば、南朝の技術の一つということができ、この技法が南朝まで遡るということになるでしょう。そのあたりを賀先生にもう一度確認したいと思います。

それから、洛陽の王湾遺跡では、新石器時代の遺跡だと思って、報告書をあまり詳しく見ていなかったんですけども、後ろのほうに隋代の瓦がちょっと出ています。軒丸瓦の側面に何本か縦の突起が付いており、丸瓦の先端のところには、それに対応するように溝が付いています。そこに瓦当部の粘土を押し込んで、結果的に外縁の上半部は丸瓦の先端部が出ているということになります。これについては、実物を見ないと確認できませんので、北京大学にあると思いますが、いずれ行って見せていただきたいと思っています。「SR技法」かもしれません。今まで、中国で「SR技法」の確実な例を知りませんが、すぐには結論が出ないと思いますけど、とりあえず賀先生には、南京にC-2のような瓦があるのかないかをお教えいただきたいと思っています。

**賀** 128頁図5のC-2という接合の仕方は、南朝にもあります。まず瓦当を作って、瓦の上半部に丸瓦をのせ、この丸瓦の広端部が瓦当の上半部の外縁にもなるというような作り方です。ただし、丸瓦と瓦当を接合するさいに、丸瓦の先端部の凹面にキザミを付けてから丸瓦を接合するというような方法は、今のところ南京周辺にはありません。

**司会（佐川）** ありがとうございます。

**亀田** 大脇さん、これは、キザミのところ段差があるんですか。

**大脇** 実物を見ていないので、ちょっとわからな

いのですが、たぶん、接合粘土が段のように残っているのではないのでしょうか。接合粘土がはずれているんだと思います。

**亀田** つまり、無加工だということですか。

**大脇** はい、そうですね。それから、もう一つ賀先生にお聞きします。C-2技法が南朝にあるということでしたが、瓦当文様で言いますと、今回の資料集の中ではどのタイプになるのでしょうか。

**賀** 要は外縁の上半部がはずれているものですが、56頁附図1の1、58頁附図3の4、59頁附図4の3、これなどがC-2の技法で接合している例です。

**司会（佐川）** 大脇さん、よろしいでしょうか。

**大脇** はい、ありがとうございました。たしかに、58頁附図3の4の断面図などは、図からだけでもそういう作り方の瓦なんだということがよくわかる、いい資料ですね。これに近いものが日本にもありますので、たいへん面白くなってきたなと思います。どうもありがとうございました。

**司会（佐川）** お二人の話に水を差すようですが、今回の瓦調査で写真を撮ったのはすべて私です。撮った立場、観察した立場から言いますと、少なくとも私どもが見た資料に関しては、今の賀先生の見解には同意できないというのが私の考えであります。ですから、実物を見ながら検討するということが必要になりますが、一応、そういう部分の写真などについて、現地でかなり注意をして撮影し、これはと思う資料は当然記録をとっていましたので、そのとき、もしもC-2技法と認められる資料があれば、どこかで話題になったはずですが。しかし、われわれの中では、そういう議論にはならなかったということだけを申し上げておきたいと思います。

朱さん、北の方の事例についてですが、鄴城も

含めまして、このような技法の存在を裏づける確実な資料というものはあるのでしょうか。

**朱** これまで4年間、漢魏洛陽城や隋唐洛陽城、隋唐長安城をはじめ、鄴城でも図面や拓本をとったり観察したりしましたが、こういった技法のものは見たことがありません。それが特別なものなのか、あるいはかなり広い範囲でこの技法があったのか、今の段階では何とも言えません。

**司会（佐川）** この資料も含めて、南朝などとの関係を考えたときに、当然、こういう要素も中国側にあってもいいんじゃないか。そういう想定もあるわけですから、そういった視点も放棄せずに、引き続き北朝も南朝も含めて、検討の材料の中に入れていくということが重要だと思います。

それから、もう一つ。昨日の南京で発見されたという軒平瓦が、南朝のものではないかということなんですけれども、賀先生、今のところまだ1点だけですが、年代的には南朝の時期のものと考えてよいということでしょうか。

**賀** 今ご覧いただいているこの軒平瓦ですが、南京市の台城遺跡という、宮城部分から出土したもので、南京市博物館にあります。地層から見ても南朝の時期のものということになります。

**司会（佐川）** 今後、関連するものが増えることを期待したいと思います。それでは、先ほどの軒平瓦の話で前半部分は締めくくりますが、亀田さんの報告の中で、帝釈寺の隣りにオープンした展示館に行くとき一番いい資料が展示してあるということでした。このような瓦当文様をもつものが、今後、南京でもたくさん発見されることを亀田さんも期待しているとのことでした。

金誠龜先生、この帝釈寺の軒平瓦について先生のお考えをお聞かせいただけますか。

**金誠龜** 基本的な考えとしては、この帝釈寺の軒

平瓦は統一新羅、そうでなければ高麗まで下ると考えています。帝釈寺は、百済の後期、640年くらいに創建され、統一新羅の前半ぐらいまで続きますが、その後はほとんど廃寺状態になり、高麗になって新たに再建と言いますか、大きく復興するという状況です。その再建時期、復興時期に作られた「帝釈寺」と書かれた文字瓦が出土しています。やはり、韓国の軒平瓦の初現は、統一新羅の初頭くらいの、土器口縁に類似する軒平瓦ではないかと考えています。

帝釈寺の瓦当文様で申しますと、獣面文、鬼面文を中心にして、両側に唐草文を配しています。こういう文様は仏国寺の石窟庵でも出ていますので、8世紀後半から9世紀代でもあります。高麗の初頭まで時期を下げて考えても、たとえば扶餘の金剛寺でも獣面文、鬼面文を中心として、左右に唐草文を配する瓦当文様を見ることができます。

平瓦の製作技法についても、百済では模骨痕が一般的に見られるわけですが、帝釈寺のこれは、円筒形の模骨は全くないというものですので、技術的にも違いがあります。ですから、そういうものが百済の地方で突如として現れる背景は考えたいと思います。

最近、益山で、たとえば王宮里遺跡とか帝釈寺とか、別の側面で注目を浴びているところがあります。それは、統一新羅の滅亡直前に後三国時代があり、その時の後百済の王、甄萱（キョンフォン）の動きと関連づけて遺跡を評価していこうという方向です。たとえば、先ほど言いました王宮里遺跡は、造られた当時は百済の武王の時代の都城でした。その後、新羅によって百済が滅亡させられた後に、今、石塔が建っていますが、また寺として復活するわけです。その時期を、王宮里遺跡を発掘調査している方々は、陶磁器が出てこ

いことから、統一新羅でも少し早い段階に遡らせて考えておられますが、王宮里遺跡から出土する瓦の文様などを見ますと、帝釈寺とよく似ています。これから解決しなくてはいけない問題もありますけれども、私は、王宮里遺跡はやはり後三国もしくは高麗まで下げて考える必要があるんだろうと思います。そして、帝釈寺の瓦についても同じように考える必要があると思います。胎土や焼成を見ても、百済の瓦とはまるで異なりますので、そのような所に重点を置きたいと思っています。

**司会（佐川）** ありがとうございます。中国の場合は、隋・唐の段階、おそらく宋の段階くらいまで、箆型を使った滴水の軒平瓦というものは今のところないわけです。したがって、こういった精巧な文様をもった、箆で文様を作るというような軒平瓦の実現というのは、非常に重要な問題であろうかと思います。

それでは、ここで休憩をとりたいと思います。

**司会（亀田）** では、再開いたしますが、韓国の話の続きをさせていただきます。帝釈寺の軒平瓦については、確実に浮いている資料で、先ほど金誠龜先生がおっしゃいましたような理解のしかたもあります。それに対して、金有植先生は、ずっと新羅について研究されていますが、そういった目でご覧になると、あの瓦はどういうふうに理解されますか。

**金有植** 私は、三国時代に軒平瓦があったかどうかについて論文にまとめたことがありますが、結論としては、「ある」と考えていますので、金誠龜先生とは反対の見解をもっています。ただ、私は、まだ百済の瓦というものをきちんと見ておりませんので、帝釈寺の瓦を百済だと断言するのは、ちょっと難しいところがありますけれども。

皆さんご承知だと思いますが、最近、益山の弥勒寺の西塔から舍利容器と舍利が出土して、大きな話題となりました。その舍利容器には、舍利奉安記という銘文をもった舍利容器がともなっていたわけですが、その銘文がなかったら、この舍利容器は今までの金属工芸的な研究では、おそらく統一新羅まで時期が下げられてしまったらと思うと思います。先ほどもお話に出場した王宮里遺跡でも、昔、舍利容器が出土していますが、それは、従来、統一新羅まで下ると考えられていました。ところが、弥勒寺の舍利容器の出現により、やはり百済まで上げてよいのではないかという議論が出てきています。

帝釈寺の瓦に戻りますけれども、正しく評価できるかどうかわかりませんが、統一新羅の軒平瓦の瓦当と平瓦の連結角度を見ますと、統一新羅の初期のものは、直角に近い角度で付けられています。それに対して、帝釈寺の軒平瓦は、亀田先生の資料の150頁にありますように、少し鈍角についておりまして、かつ瓦当の下端部を丸く処理しています。このようなものは、基本的に統一新羅の初期の段階には認められないと考えます。

また、統一新羅の瓦当文様としての唐草文の変化を大きく見ると、統一新羅の中期・後期、そして高麗となるにしたがって、徐々に、たとえば茎ですとか唐草自体が太くなっていく、瓦当の中で占める割合が大きくなっていくことに注意する必要があります。ですから、ここで断言するのは避けたいのですが、そのような面から見ると、やはりこの唐草文というのは、非常に細くて洗練されており、統一新羅まで下るとしても非常に早い段階、もしかすると…、というところでとどめたいと思います。きちんと断言できなくて申し訳ありません。

**司会（亀田）** どうもありがとうございました。本当にまだ答えが出せないのだとは思いますが、いろいろな特徴をもっていますので、文様論のほかに顎の形や、生産と供給の関係など、さまざまな面から今後検討されればと思います。

資料の150頁には、百済の有段の軒平瓦、指で押さえたもの、そして土器口縁状のものをまとめて載せております。そこで大脇先生、中国やアジア全体の瓦をずっと研究されておいでですが、新羅にもこのような有段のもの、土器口縁状のものがあります。今のところ、高句麗についてはわかりませんが、百済・新羅での位置づけとしては、中国との関係も含めて、どのようにお考えでしょうか。

**大脇** どこでもそうだと思いますけど、瓦作りの最初というのは、土器工人が絡んできますよね。飛鳥寺では、瓦博士が4人来ていますが、これはプロがやってくるわけですよ。だから、技術が総体として入ってくるんですけど、それでも飛鳥寺の場合は、土器工人が関与していた可能性を示すものとして、補足の叩き締め同心円文がついている平瓦などがあるわけです。

漢城期の百済の瓦などを見ていると、全部、土器工人が絡んでいるなと思います。瓦の文様は朝鮮半島、あるいは大陸の南朝、北朝からもかなり崩れたものが入ってきているけれども、作っているのは土器工人。だから、土器と同じような作り方をしている。今、ご質問にありましたように、百済とか新羅には、大甕の口縁のように反ったもの、中には全く土器と同じで、凹面に布目がつかないものがあります。それから、ここに出ているような、私は「梓板」とは言わず、「側板」と言っていますが、側板の痕跡とか桶を閉じた痕跡ははっきり出ているものもありますけれども、やは

り基本的には土器工人が絡んでいるのではないかと思います。統一新羅の土器と軒平瓦の関係はわりと希薄ですが、その希薄な中で軒平瓦を作ろうとしたときに、土器工人は日頃作っている土器を意識してこれを作ったというようなものではないかなと思います。

**司会（亀田）** どうもありがとうございました。私も基本的にそうだと思いますが、そうすると、先ほどの軍守里廢寺の瓦に関してはいかがでしょうか。

**大脇** 軍守里廢寺については、私は、北魏の永寧寺あたりからストレートに入ってきていると思っています。塑像もとてもよく似ていると思います。

**司会（亀田）** そうですね。そういう意味で、中国から百済へは、何度も言っていますように、入り方は一つではなくて、いろいろな流れで入ってきていると思われれます。大脇さんが言われたように、私も本文に書いていますが、基本的に中国との関係の中で理解できると考えています。ですから、縄叩きについても、もしかしたらそうかもしれません。つまり、このような中国からのグループと、地元の土器工人が関わっているグループがあると思います。

それでは金有植先生、百済と新羅で同じようなものが出るということで、そうした初期の段階の軒平瓦と土器作りの工人の関わりについてはいかがでしょうか。

**金有植** 慶州の勿川里の窯跡から、当時は用途が不明でしたが、土器口縁を切断したような製品が出土しています。また、その後、新羅の月城塚字からも同じようなものが出土しています。断言はできないのですが、百済のほうの初期の蓮華文軒丸瓦と土器口縁状の軒平瓦は、セットになるのではないかという見解も、韓国では提示されていま

す。結論的には、勿川里の資料もそうですし、また粘土帯を用いておりますので、やはり土器工人が深く関わっていたのだらうと判断しています。

たとえば、忠州の塔坪里などでは、統一前の新羅の蓮華文軒丸瓦と一緒に、顎をもった無文の軒平瓦が出土したりもしています。軒丸瓦には2種類あり、どちらからその軒平瓦と組み合うのだと思いますか、一つは明らかに統一新羅まで下るもの、もう一つは三国時代のものです。この三国時代に遡ると考えている軒丸瓦の凸面には叩きが残っていますが、その叩きと顎をもつ無文の軒平瓦の叩きが類似しますので、その点から見て、顎をもつ無文の軒平瓦は、三国時代の軒丸瓦とセットになるのだらうと思います。

勿川里の軒平瓦に戻りますけれども、土器口縁状のものをどのように使ったのかというと、雨水が滴り落ちるといふか、滴り落とすようにしているとしか考えられないので、やはりこれは軒平瓦でいいのだらうと今でも判断しています。

**司会（亀田）** ありがとうございます。今の金有植先生、それから大脇先生のお話もそうでしたが、瓦作りの最初の段階に土器工人が関与したということですね。それが、部分的な関与であった場合もあれば、かなり主体的に関わった場合もある。皆さんご存じのように、日本でも福岡の牛頭窯跡群で、齋部さんが報告されていましたが（齋部麻矢「九州における初現期の瓦」『古代瓦研究1』奈良国立文化財研究所、2000年）、初期の瓦の中に「泥条盤築」のものがあります。日本では大体7世紀の前半ぐらいからと考えていますが、同様な技法によるものが朝鮮半島にもあるということです。ただ、漢城時代の「泥条盤築」についてはデータがあまり出ていないので、百済の瓦に関してよくもめるところです。

先ほど清水さんもおっしゃっていましたが、大通寺の瓦が熊津期の初期の段階のものとして出てきます。しかし、少し漢城期の瓦とはギャップがあります。その後、本格的な瓦作りが展開し、花谷さんのお話にありましたように、その流れに乗るものが、瓦当文様や作り方も含めて、セットで飛鳥寺に入ってくるということです。ただし、どうも特定のきちんとしたセットではなさそうだと思います。そのあたりのことを清水さんが以前お書きになっていたと思います。清水さん、朝鮮半島、百済から日本へというお話を少しお願いできますか。

**清水** 先ほどの中国の南朝と百済の関係とも関連するのですが、まず、回転ナデですね。私は、瓦当裏面の回転ナデ成形を一つのポイントと考えています。先ほど申しましたように、百済では大通寺式、弁端点珠式ですが、その系統で回転ナデ技法が確認できます。また、丸瓦の接合については、大通寺に関して、私は凹面カットと判断しましたが、その次の段階の資料が、ちょうど熊津期から泗泚期にかけて展開するんですね。金德里窯という瓦窯で確認された資料につきましては、丸瓦の接合技法が片柄式で、かつ、瓦当裏面に回転ナデ成形の痕跡が認められます。そういったものが、泗泚期の中では旧衙里の寺跡などを中心に確認でき、同じようなものが日本で最初に造営された寺である飛鳥寺に入ってくる。そして、そのうちの一派が星組になっていく、というような流れが、簡単に見ますと確認できるという状況です。

ただ、飛鳥寺の花組のほうですが、弁端切り込み式ですけれども、こちらについては文様的には扶余、あるいは益山地域で見られる弁端と非常に近いので、ストレートな導入というものが窺えます。花組の丸瓦の接合技法の特徴であります丸瓦

の端部上面をカットするという技法がセットで組み合うという事例は、今のところ見つかっていません。ただし、益山の弥勒寺に、若干、凸面側を斜めにカットするようなものがありますので、そういったあたりに飛鳥寺の花組の系譜があるのではないかというような予測はできます。

**司会（亀田）** ありがとうございます。花谷さんは何度も韓国に行かれて、百済の瓦、それから飛鳥の瓦に最も詳しいお一人ですが、飛鳥寺から山田寺ぐらいまでの間に、何度も入ってくるよんだという先ほどのお話の中で、百済の、たとえばどのへんだろうとか、どのグループだとか、そういったことはお考えでしょうか。

**花谷** 百済の中で、寺院単位でそれぞれの特徴を把握するところまでは見切っていませんので、ちょっとそこまでの予測というものは立てていない状況です。

**司会（亀田）** ただ、この中にもお書きのように、弥勒寺にこういうものがあつたよとか、清水さんも書いておられますが、日本の飛鳥寺以外の瓦も含めて、何かつながりそうかなとか、たとえば弥勒寺の瓦が九州のあの瓦につながるのではないかなとか、そのあたりはいかがでしょうか。

**花谷** 九州では、惣利西遺跡というところで、玉縁部の凹面に布目のない玉縁丸瓦が出ています。これは飛鳥寺とは雰囲気が違うなという感じがしまして、そういったものは、必ずしも百済から畿内をへて九州へというルートを考えなくてもいいのかなという気がしています。

**司会（亀田）** そういう意味では、直接、百済から九州という可能性があるということですね。そうしますと、百済中枢部は、飛鳥の都だけでなく、一方では九州と関係があつた可能性が考えられますね。それから、先ほどの竹状模骨、簾状模骨瓦

についてみますと、本流にはなりえませんでした  
が、坂田寺に入っています。今のところ、百済の  
中枢部ではあまり見つかっていませんが、そうす  
ると、これは別ルートで、周辺部からということ  
でしょうか。

**花谷** 今のところ、周辺部しか資料が見つかって  
いないので、それがそういったかたちで入ってき  
たのかということについては、いくつかクリアし  
なければならない問題があります。

坂田寺の竹状模骨は、重弁蓮華文軒丸瓦に伴う  
可能性を想定して、飛鳥の中では一番古い竹状模  
骨と考えています。先ほど話を聞いていますと、  
石神遺跡で竹状模骨丸瓦が最近出土しており、7  
世紀前半代の瓦を伴っているということです。そ  
のあたりは今後、慎重に検討されるということだ  
ですが。

論文（花谷浩「丸瓦作りの一工夫」『文化財論叢  
Ⅱ』同朋舎出版、1995年）を書いたときには、主流  
は飛鳥寺禅院の7世紀の第3四半期から第4四半  
期にかけて入ってきたものが、近畿地方と九州に  
も広がっていくというように考えていました。そ  
うすると、ちょうど百済滅亡の時期に重なってき  
ますので、山城づくりのような技術導入を絡めな  
がら竹状模骨を考えられないか、というイメージ  
を持っていました。

ですから、飛鳥の中で7世紀前半代にもいくつ  
か竹状模骨があるということになると、それとは  
いったん切り離して、また別の話を考えなくては  
いけないと思っております。問題は、事実が増え  
れば増えるだけ、複雑になってまとまりがなくな  
ることです。

**司会（亀田）** ありがとうございます。基本的  
に、私も花谷さんと同じように考えていますが、  
いろいろな所から何度も入ってきて、複雑に絡み

合うから、そう簡単に割り切れませんよというこ  
とですね。最近でも竹状模骨をもつ例がまた飛鳥  
で見つかるという具合に、データが増えれば増え  
るほど複雑化するという状況です。

技法的な問題については、崔兌先先生に円筒の  
桶や、叩き板の大きさ・形などいろいろなお話を  
していただきましたが、日本でもそれらは受け入  
れられ、大宰府のほうには入っているんじゃない  
かということもあります。韓国の中で、そういう  
桶ですね、模骨の痕跡や枠板の痕跡のあるものと  
ないもの、先生が論文を書かれてからだいぶ時間  
もたっておりますから、いろいろ資料も出ている  
かと思いますが、そういう新しい成果もふまえて、  
桶や叩き板、それから竹状、簾状の模骨に関して  
も、何かおわかりの部分がありましたら、教えて  
いただければと思います。

ちょっと補足しておきますと、新羅の瓦に、先  
ほどの帝釈寺の瓦もそうなんです、桶の痕跡が  
ないというのは、皆さんも気にされていたんです  
が、それをきちんと取り上げた方はおられなくて、  
それを崔先生が最初に取り上げられたわけです。  
そこで、桶の痕跡がないものを注意して見ていき  
ますと、これまでは新羅の特徴と言われていたの  
ですが、中国にもあるということが、山崎さんのお  
話の中にありました。そうなってくると、新たに  
中国から来たのか、高句麗とか百済から来たの  
かが問題になりつつあるわけですが、その点につ  
いてはいかがでしょうか。

**崔兌先** 崔兌先と申します。私にはちょっと難し  
い質問が並べられてしまったような感じがいたし  
ます。韓国に帰ってもう一度勉強をしたいと思っ  
ていますが、私が論文（崔兌先『平瓦製作法の変遷  
に対する研究』慶北大学校文学碩士学位論文、1993  
年）を書いたときは、まず最初に、新羅の平瓦の

特徴はどのようなものなのかという問題意識から始めました。そして、佐原真先生の有名な論文(佐原真「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』58巻2号、1972年)を読んで、その方法論に沿っていった場合に、模骨痕があるものとなないものということでは、漢城とか扶餘では模骨痕をもつ例が多く、はっきり言ってしまうと百済と新羅とで分かれる可能性がある、ということ述べたわけです。それから少し時間がたっていますが、基本的に、大きな枠組みは変わっていないだろうと判断しています。

そして、製作技術的には、時間性と地域性の両面があると思います。まず、時間性ということから見ると、最近になって、風納土城では模骨痕跡があるものとなないものの両方が共存していますが、一つの建物で模骨を使ったものと円筒形のものが両方が一緒に葺かれるということは、まずないのではないかと思います。その理由の一つは平面形の違いです。模骨を使うものは平面が台形に近く、一方、模骨の痕跡がないもの、つまり模骨を使わない円筒形のもの平面が長方形に近いというような違いが、最近ではずいぶんわかるようになってきています。風納土城についても、廃棄の段階では一緒に捨てられたのかもわかりませんが、導入の段階についてはちょっと時期差を考えたほうがよいのではないかと考えています。

また、慶州の勿川里ですとか雁鴨池などには、平面が台形に近い平瓦もありますので、模骨の桶が全く使われなかったというわけではないだろうと思います。それでも、新羅ではやはりほとんど模骨を使っていない。とくに新羅への瓦の導入・成立段階では、非常に少なかったのではないかと判断しています。

韓国の竹状模骨、亀田先生の言い方だと簾状模骨についてですけれども、これは桶のようなもの

と判断するよりは、やはり何か内側にあって、布の代わりに巻いたのではないかと考えています。単純な見方かもしれませんが、いくら丈夫な葦のような棒状の素材で作ったとしても、それだけで叩きに耐えるような内型にはなりえないのではないかと判断しています。

**司会(亀田)** ありがとうございます。先ほども申しましたように、簾状になっており、その合わせ目が認められますので、桶状のものに巻いて布の代わりにしたということもあろうかと思いません。それから、私は縄蓆紋、「蓆」という言葉を使ったんですが、凹面に、縄ノレンふうのものを巻いたものもあります。簾状のものと両方あるわけですが、今のところ、こういうものが百済と新羅の国境地域にありながら、一方で新羅に関しましては、初期の段階から円筒桶を使っているわけです。新羅の円筒桶の起源、どこから来たのかという点についてはいかがでしょうか。

**崔** 少なくとも、風納土城までは遡るだろうということは言えます。その後、問題になるのは高句麗だろうと思います。高句麗の瓦製作技術が南朝と北朝のどちらの影響を受けているのか、そういうところが問題になってくると思います。

**司会(亀田)** ありがとうございます。今も申し上げましたが、韓国、朝鮮半島の中でもわかってきた部分が増えるとともに、わからない部分もまた増えてきたというのが現状ではないかと思えます。日本との関係についても同様なのでしょうけれども。

当初の予定より5分ほど過ぎておりますが、会場の皆さままでどなたか、これだけは聞いておきたいという方はおいででしょうか。

**山路直充** 時間がないのに申し訳ありません。本日ほとんど扱われなかった文字瓦、丸・平瓦にか

かわる文字瓦について、朱先生、賀先生、亀田先生に質問したいと思います。北朝には工人名、もしくは瓦を作る工程に関する文字を記した文字瓦が多いと理解してよろしいでしょうか。

朱 文字瓦の比率についてははっきり言えませんが、印象としては、北魏洛陽城のほうが多いように思います。たとえば1号房址などではかなり多く、軒瓦と平瓦の両方があります。しかし、ハンコ（印）による文字は少なく、ほとんどが手で書いています。人名とか日付、それから製作工程に関係する文字ですね。それに比べて鄴城のほうは、組織のハンコ、当時は軍隊に関係して、瓦を作る組織がありますし、人名、それから日付ぐらいでしょうか。工程にかかわる文字瓦についてはよくわかっていません。

山路 そうしますと、基本的には、工人とか瓦を作る組織とか、そういったものを管理するようなイメージということでしょうか。

朱 はい。個人のものという性格ではないと思います。

山路 いずれにしても、グループとかそういう組織を表しているということですね。

朱 はい。グループというか、国の工房ですね。

山路 ありがとうございます。次に賀先生にお伺いしたいのですが、揚州城では後半になると、スタンプも「西窯」とか「東窯焼造」といった、製造にかかわるものが出てきている。今日のお話では、後半に北方の技法が入ってくる段階で、そういう文字瓦も出てくるということですが、南朝の段階にそういった文字瓦はあるのでしょうか。

賀 南朝の文字瓦ですけれども、まず数からいうと非常に少ないです。おもにハンコ（スタンプ）のタイプのものです。一つは「官」という文字を書いています。これはおそらく官窯を示している

と思います。政府が管理している窯という意味ですね。もう一つは、昨日お話した郊壇（鐘山南朝祭壇遺跡）では、大地を祀る壇のところに建物があるわけですが、そこから出土したスタンプには、「東」とか位置を示す内容のものがあります。ですから、今のところ、スタンプで2種類。そのほか、自由にヘラ書きのように書いた文字もありますが、量は少なく、内容がほとんど読めないという状態です。

山路 ありがとうございます。次に亀田先生に伺いたいんですけども、先ほど軍守里廃寺の瓦で「南」と書いてある文字瓦をお示しいただきましたが、これについては大脇先生から、北魏の永寧寺の影響ではないかというお話がありました。そうすると、技法そのものを伴って、瓦生産に関わる工人を管理するシステム的なものが一緒に伝播している可能性があるのでしょうか。先ほどの亭岩里の丸瓦にも「玉」とヘラ書きがあります。スタンプは別にして、こうした文字瓦がどのぐらいの量出ているのか存じませんが、そういった点についての検討をなしうるものなのかどうか、お教えいただければと思います。

司会（亀田） 私自身もよくわかっておりませんが、軍守里廃寺のものは「南」でしたよね。そうすると、管理とはまた別かもしれません。ただ、どこからそういうものが入ってくるのかというのは、スタンプ自体もそうですけど、問題だと思います。それから、スタンプはそれなりにありますが、文字を書いているものは、そんなに多くないですよ。1字だけのものも、複数のものも含めて。山路さんがおっしゃるようなかたちで、北朝系のもの、管理体制みたいなものも確かにあるかとは思いますが、残念ながら、今のところ、まだそこまで細かい話はできていないという状況か

な、と感じております。

百済の文字瓦は、「大通」と書いてあるものが、今のところ最古ですよね。それが寺名なのか年号なのか、両説がありますが、いずれにしても南朝に関わることを書いたものが出ているのは事実です。そうすると、そのあたりはどうなるのか。正直な話、北朝系でそうしたものがあれば面白いと思いますが、お答えできるところまで至っておりません。

**山路** ありがとうございます。

**司会（亀田）** 時間の関係で、そろそろ終わりにさせていただきたいと思いますが、これだけは聞いておきたいということが何かありますでしょうか。それでは、最後に安家揺先生、金誠龜先生にそれぞれご挨拶をいただきたいと思います。

**安家揺** 皆さん、こんにちは。日本の奈良文化財研究所の皆さんと中国社会科学院考古研究所の漢唐研究室がおこなった「古代東アジアの造瓦技術の変遷と伝播の考古学的研究」というテーマの共同研究は、2005年に始まりました。日中双方の研究者は、これまでに大同の北魏平城、それから邯鄲にあります鄴城、南京の建康城、隋唐時代の揚州城、北魏洛陽城、隋唐洛陽城、隋唐長安城などの資料を調査してきました。また、中国側の研究者も、奈良を訪れて学术交流をおこないました。本日、この場で共同研究テーマに沿った研究成果の発表を聴いて、非常に多くの成果を上げていることを嬉しく思っております。

瓦は、私達が発掘現場で常に目にする資料ですが、これまで私達は、瓦の研究について、あまり重視してきませんでした。しかし、この共同研究を通して、瓦や瓦当にはたくさんの情報が含まれているということを実感いたしました。瓦の起源そのものは中国にあります、その研究に

関しては、日本や韓国にまだ追いついていないと思います。今回のこの共同研究によって、中国における瓦研究は非常に発展するでしょう。

瓦葺の建物は、中国では西周の時代まで遡ることができますが、それから千数百年のちの唐や宋の時代になっても、一般の民衆の家に瓦を使うことはほとんどありませんでした。宮殿や大寺院、役所など、限られた場所にしか使われていなかったのです。

ここで、唐代の杜甫の詩を取り上げてみたいと思います。「茅屋為秋風所破嘆」という有名な詩ですが、これを書いたとき、杜甫は今の四川省の成都の草堂に住んでいました。詩の内容を見ますと、彼の家にも瓦は葺かれていませんでした。雨漏りがするかなり悲惨な状況で、彼と家族はとても苦労したということが描写されています。

いま、画面に映し出しているこの詩には、いろいろなことが詠まれています、その中で、もしできるならば「広厦」に住みたいと、そういう希望が詠んであります。杜甫が住みたいと願った理想の家、「広厦」とはどんな建物かと言いますと、次の韓愈の詩から、そのようすがわかります。韓愈の詩によれば、「広厦」とは、軒が深く、屋根に瓦がたくさん載っている大きな家です。もう一つ、宋代の詩人の詩を見ますと、瓦を作る職人が住んでいる家は瓦を葺いていないのですが、瓦を作らない、言ってみればお金持ちの家にはたくさんの瓦が葺いてある、ということがわかります。

このように、いくつかの史料を調べていきますと、瓦を葺いた大きな建物のことを「広厦（大厦）」と言いまして、それは杜甫が羨ましがった理想の家だということがわかります。ただ、11世紀の宋代でも、そういった建物に住めるのは、非常に地位の高い高官だけで、一般の民衆の家は瓦を葺か

ない、本当に粗末なものだったということです。

一方、5世紀には、中国の瓦の技術が朝鮮半島に伝わり、さらにそれが日本へ伝わっていったわけです。このような早い時期に技術が諸国に伝わったということは、東アジアの文化交流の中でも非常に重視すべきことだと思います。今後も、東アジアにおける造瓦技術の研究が進み、さらに大きな成果を得られることを期待したいと思います。本日はどうもありがとうございました。

**金誠龜** 二日間、私も一生懸命勉強させていただきました。このような瓦を愛する方々の集まりに招待していただいたことに対して、奈良文化財研究所、それからこの研究会の前代表の毛利光さん、現代表の山崎さんに深く感謝したいと思います。また、司会をしていただいた佐川さん、亀田さん、そして進行を担当していただいた小澤さん、通訳の今井さん、高田さんをはじめ、皆さんに感謝申し上げます。瓦を愛する研究者の方達が一緒になって、このシンポジウムが成功したのだらうと思っています。

古代の東アジアの瓦と言いますが、ある意味では世界の古代の瓦と評価することができると思います。今回、日本で、日本、中国、韓国それぞれの研究者が発表したり議論したりしていった成果が、今後の瓦の研究の進展に大きな役割を果たすことでしょう。とくに日本側の研究者の方々は、製作技法を中心に、中国、韓国、そして日本の瓦を幅広く検討されました。中国の研究者の方、韓国の研究者の方には、少し申し訳ないかもしれませんが、私としては、中国や韓国では、まだまだ日本のように細かい部分の製作技法の観察ですとか、そういった調査がおこなわれていない状況だと感じています。しかし、今回の成果を、中国の研究者の方は中国に持ち帰って中国

の瓦を、韓国の研究者の方は韓国に持ち帰って韓国の瓦をとるように、それぞれの国での研究が進展すれば、今後、日本、中国、韓国のお互いの研究成果を、より深く交流させられるだろうと思います。

そういった意味で、本日はシンポジウムの結論を出すというよりは、お互いに問題意識を共有し合い、研究を深めていく重要な契機になったのではないかと思います。このような機会を作っていただいた奈良文化財研究所の皆様方には、改めて御礼申し上げたいと思います。また、二日間ご静聴いただいた皆様方に深く御礼申し上げます。

もう一つ、安家揺先生は私とお歳が同じらしいのですが、今回、ともに閉会の辞を述べさせていただいたことにもありがたいと思っています。これからも、皆様ご健勝で研究を続けていただくことを願います。どうもありがとうございました。

**山崎** では、これでシンポジウムを終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。